江戸名所図會

十五

和書門
類 八六六三
號 一一六
函 二
架 一〇
冊

内閣文庫
和書
類 八八七〇
號
冊 二〇
函 一七四
架 八

内閣文庫
番號 和 8870
冊數 20 (15)
函號 174 36

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

根津権現社　上野より五町ばかりを隔て乾の方にあり

祭神　素盞烏尊　産土神　相殿　左山王権現　右八幡宮　源家の祖神

当社境内始は　甲府公　御館の地なりしを根津権現は

大樹の文昭公　御産土神にて　御宮奉造あり久敷後に右の御館

の地に賜はり宝永年中新に当社を御造営ありて結構仮に遷身門

掛る根津大権現の額は大明院宮に辨法親王の筆蹟なり舊地は千

駄木坂の上元根津といふ所なり　祭礼は八月

観音堂　本社の左岡山のくまにあり　絵陽清水まの模にして

当社境内は假山泉水等とかく草木は花四季を逐て絶ず實に遊観

の地なり殊に門前に貸食店餐を多くて婦人を慫はしめ酔客の

聲囂断なし

普賢山法住寺　谷中三崎にあり　浄土宗にして本尊は阿弥陀如来を

安置す冠山八幡隨意院引頃和尚なり其頃一流の高徳にして貴

上野寛永御
獲門
此辺貸食店あり
此辺

根津権現社
本社
拝殿
別當

賦の信仰如かゝる宝暦年中當寺を草創し其砌貴賤男女を擇ハず土砂を運ふ輩へ一貫毎に十念を授くることをひて老若を厭ハず日々に群集し不日に成就せり此地ハ清浄無塵の佛界にして六時禮讃の聲ハ雲風と共に寂々なり

日登山妙林寺　法住寺の西小川を隔てあり日蓮宗にして天文年中の草創なり冥山ハ日秀上人と正徳年中故ありて天台宗に改められ後海法印を中興冥山と云

田中辨財天　昔ハ因の暇道の草堂に安置あり〻を弘安六年に内海何某始て此社を建立せり〻〻縁起に洋あり

顧地藏尊　弘法大師の作光入法師感得の霊像あり

霊験不動尊　延享三年七月八日淺草川より出現せり像あり丈長一寸七分背の面に銘あり

讃曰金剛石堅　神恵佛救　授福與德　霊験不動
大同二丁酉四月　空海

大観音　千駄木七軒寺町光源寺といふる浄宗の寺内にあり和尚長谷寺の写まゝて十一面観音の立像張一尺六寸なり又同堂内に千躰の

本堂
大方丈
地蔵
表門
現川

三宿法住寺
俗ヨ新幡隨意院ト云
妙林寺
蛍澤
裏門
三八峯
蛍沢
妙林寺

観音を安久貞享年中江府の高人丸吉兵衛かるゝ是を建立久大賞山浄心寺　丸山町よりあり日蓮宗よして太田資高の妻を御
心院日海禅尼　と号す　草創久北条五代記ゆ永徳七年小条氏康と里見義弘と
国府臺まで合戦の時資高をのれゝ妻の親おりし太田下野守
小田原方の先手く　と渡り合戦ゆ資高　里見方　と味方　棒を以て曙下野守を打殺せり軍
散して後妻此事を国大ゆ歎き葬礼　初建立の地ハ　当寺姫ハ
父の菩提の為ゆ武只神田ゆ浄心寺を建立久とぞ　門内平川へ
神田よりしを小石川ようりされ後後今の地ようりさか
按るゆ寺伝に太田資高の室ハ小条氏綱の妹ゆして康資の母おり依康資母後の
ため天文十九年　当寺を戸平川ゆ草創久といふり慣の俗ゆし天文十九年とあれハ
寺説を以て是とすべきあ返て考証すべし　当寺の鐘撞人ハ七ひたり俗ハ深草元政
おり草山集ゆ出るゆよくに挙く

浄心寺鐘銘　並序

古者論門創守文二者之難矣蓋無州創莫成守文
無守文莫遂草創然者皆難矣武武江浄心寺山号
大覺開基祖曰日成乃以天文十九年創之而九世
祖曰日真方此之時江府大火因移地於小石川大

揚再興之力蓋浄因盱感赤幾佛殿方丈及厨庫書院煥乎新成矣極智呼照如々也泫界絶封驅絶方
所而不礙壁剎覺王之知頃者我觀彼久遠猶如今
日以古今以遠近而不分王之土也覺王之遠時是也由我
此觀之府内之旧址城外之再興新基内外雖異均是我
土也昔日之開基今日之地易昔日之處今昔不二内外一時
古之所云州創寺文二難相岳二師之功不名弘
也且以今日之地易昔日之處今昔不二内外一時
有斯人焉有斯處焉而又欲相岳二師之功不名弘
矣鐘成乞銘於余雖以固陋不推鐘告四方以銘曰
浄心為真因克峻拒焉
以名山興寺大覺為真位新開石川寺
如々常寂光已離火宅塵
斯備晩成器東西異
善武東漸土音聲作佛事
駒込淺香町にあり伊勿赤目山の住職萬行和尚田圃の時
目赤不動堂
供奉せし不動の尊像屢霊験あるゆゑ仍て其威霊を忘れ別に今れ
像を彫刻して彼像を瞻籠とす則赤目不動と号し此所に一宇を建
立せり
始千住の草堂をむすびて安置あるを寛永の頃大樹伊故豊の御
今の取よ地を賜ふ千住の草堂は動坂の号あり不動坂の畧語なり草堂
のあるゆゑ後年終に目黒目白に分れて目赤と改むるとそ
同地あり

諏訪山吉祥寺　同所壹町そうり北の方よりあり曹洞の禅宗よりて江戸檀林の一ゝ国て第檀林と号ス諏訪明神の敷地なる故よ諏訪山と称ス本尊ハ釋迦如來冠山ハ青巖周陽禅師なり當寺ハ長禄年中太田持資江戸城を営ゝ頃かゝこと井を堀ゝよ土中より吉祥増上の文字あゝふ銅印を得そう依古瑞なりとて一宇を建直よ吉祥庵と號く

[illegible]城中和田倉其田地なり其後北条幕下遠山丹波守中興ス天正年中[illegible]城造営の時五代目用山和尚神田の墓よ地を賜ひ寺領等を附せられ遂う洲住の頃なり明暦三年今ハ地ようつゝる水道橋ハ當寺和田の墓よりゝ頃の表門の地なりそなよ寛文年中江戸拾弓ゝも水道橋と吉祥寺橋と記せり

駒込神明宮　同所二丁そうり北の方よりあり社傳よ云文治五年右大將頼朝公奥州征伐の時霊夢の事ありゝる其朝此あゝうよ社地を求め索りゝよ一松林の枝よ大麻のかゝれるあり公是を拜ゝひ是霊夢の應なりとて直ゝ其地よ神明宮を勧請ゝと云々其後多くれ星

吉祥寺

表門の内左右
並木の桜ハ
其昔
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan

駒込神明宮

国立公文書館
National Archives of Japan

霜を掻て破壊よとよひ〜城慶安の頃堀丹波守利直再興あり

例祭ハ九月十六日なり

富士淺間社　同所よあり桑神木花冠那媛一坐なり往古霊驗あるゆ仍て是を鎮坐といへり當社昔ハ本々加加奈の後園よあり〜〜寛永年中今の地よ遷さる毎年六月朔日祭禮ヨて前夜より詣人多く道路よ充り此地の産物として麥菓細工の蛇を〜ひよ金寂五炙の紐あとを繁華〜

寶珠山與樂寺　田畑村よあり真言宗ゆ〜て本尊地藏菩薩ハ佛ユ春日の作冠山ハ行基大士なり

阿彌陀堂　本堂の左の方よあり本尊ハ行基菩薩の作六阿弥陀ヨ四番目なり

田畑八幡宮　同所西の方よあり田畑村の鎮守とす相傳ふ文治五年頼朝公勧請す昂駒迄神明宮と同時の遷座なりと云別當八真言宗東覚寺と号して弘法大師の作の不動尊を本尊とす冠山ハ

六月朔日
冨士詣
前夜より詣人多く
甚賑つゝ此日安
藁細工の蛇をこしよ
五扇五文の細工
と蜘蛛ノ

国立公文書館
National Archives of Japan

圓勝寺

五石松

當寺ハ五石松とて一株の古松あり しかハ枯て名のみを殘せり 慶長の頃 まや

大樹 佛殺寺の折 佛寝間あり て 雲ふ 五石の紀行を下し 賜ふ よりくい 名つくるよし云 仕くり

行基菩薩あり

光明山圓勝寺 中里にあり 淨土宗にして本尊阿彌陀如來ハ慈覺大師の作脇士二菩薩ハ惠心僧都の作なり 宝山ハ深蓮社聖法上人當寺始ハ佛殿内竜の口ふあり しとそ

勢至堂 本堂の右の方少の五山の上ふあり三尊の阿彌陀佛をあく俱ふ佛立春日の作なり 今ハ勢至堂と唱へり

藤林山西福寺 染井村ふあり 真言宗にして本尊ハ阿彌陀如來を安く德一大師の作なり 當寺ハ狹女の地なりといへども殊勝の梵刹

剃あり

染井稲荷社 本堂の左ふあり 往古よりの 鎮坐にして 染井村の 鎮守 茗荷ふ 染井泉あり 今ハ水涸て其跡を 染井村を 染井 とも この泉ふ

佛寶山無量寺 西光院と号く同所北の方西原ふあり 真言宗にして 法

大師の作の不動尊と本尊とく宝山ハ行基菩薩なり 本堂ふ

南無阿彌陀佛の額ハ幡隨意院了碩和尚の筆なり

阿彌陀堂 本堂の右ふあり 本尊ハ行基菩薩の作 六阿彌陀 第三番目なり

無量寺
六阿弥陀
三番目
七社

裏
七の社
本堂
あくた堂
梶
天六

補陀山昌林寺　同所西の方にあり曹洞の禪宗にして本尊未詳観世音菩薩ハ冠山行基菩薩の作なり往古六阿弥陀彫刻の折らゝ未木を以て作りたまひしとそむゝ補陀洛寺と號其後久しく荒廢ふをよふ抛ち應永年中祥林といへる僧中興ありしより後又宗最和尚ことに昌林寺と祥を改て昌ふ改る號ハ同十八年鎌倉持氏公の母堂深く是帰信し堂宇を修營あり又文明の頃太田道灌二十余丁の秋田を寄附ス其後大永年間の兵火に罹て堂塔悉く炎焼す今ハいふ〳〵の俤のみ残存せり

平塚明神社　平塚村ふあり當社縁起云往古八幡太郎義家兄弟奥加前後十二年の戦役凱陣のこさり此地に逗留ありて城主豊島氏某或ハ鴻太郎義近ともいふ鎧一領并ふ守本尊十一面観音長七寸行基菩薩の作を賜ふ其後元永年中豊島氏城内清浄の地を擇ひて彼鎧を塚に築収ム塚の形高かゝるを以て平塚と號ス因て祭ス城の鎮守とす且社殿營むて三連枝の像殘安〳〵平塚三所明神と号ス八幡太郎義家加藤次郎義綱新羅三郎義光是義家兄弟の武功を欽崇且武運を祈らん為なりと云云別當を平塚山城寺といひ安樂院と号ス城寺の末ハ本地阿弥陀如來を安ス赤檀弗毘首羯摩天の作馮陶の玉座なり此像をこゝふ安置せ〳〵とそ

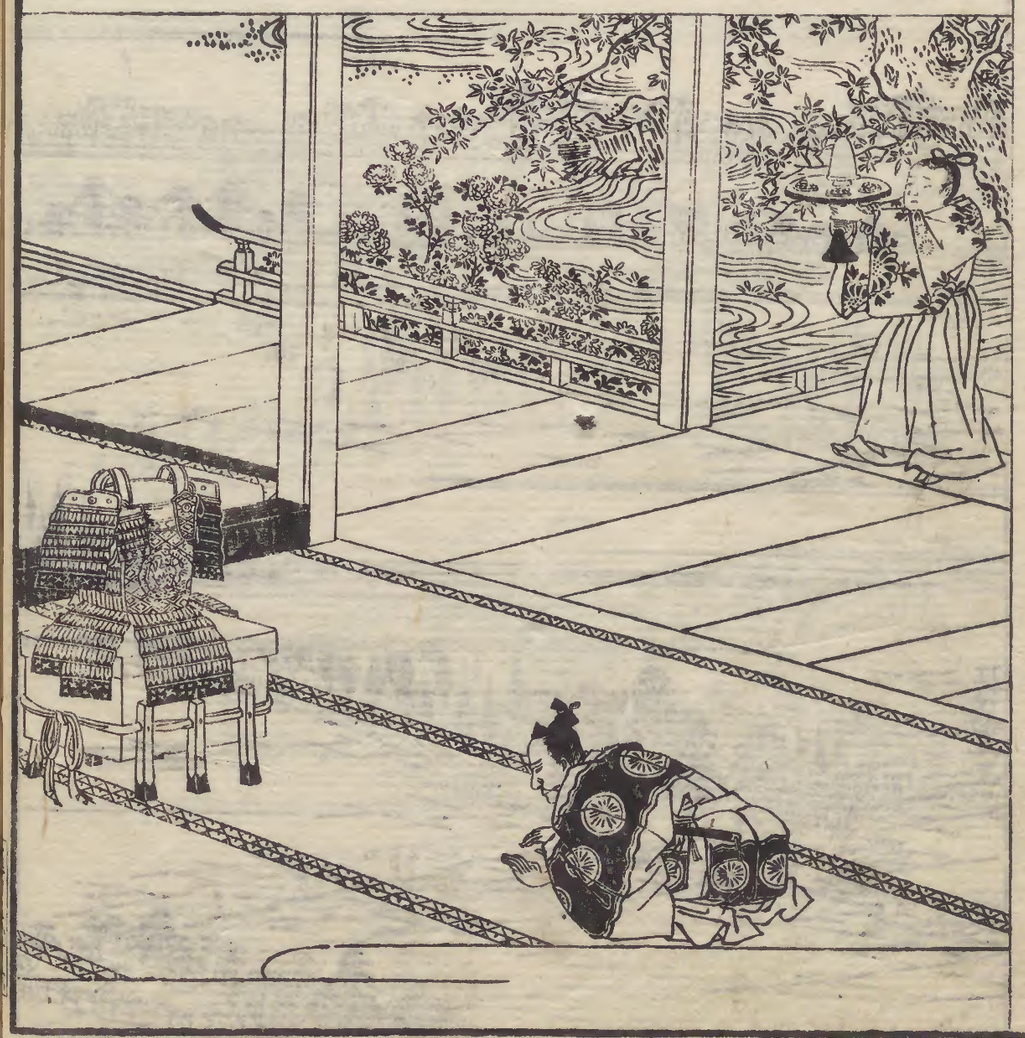
白鬚明神社　同所畑の中にあり祭神ハ猿田彦命にして豊島氏の勧請なり往古ハ平塚の城中ふあり〳〵とそ

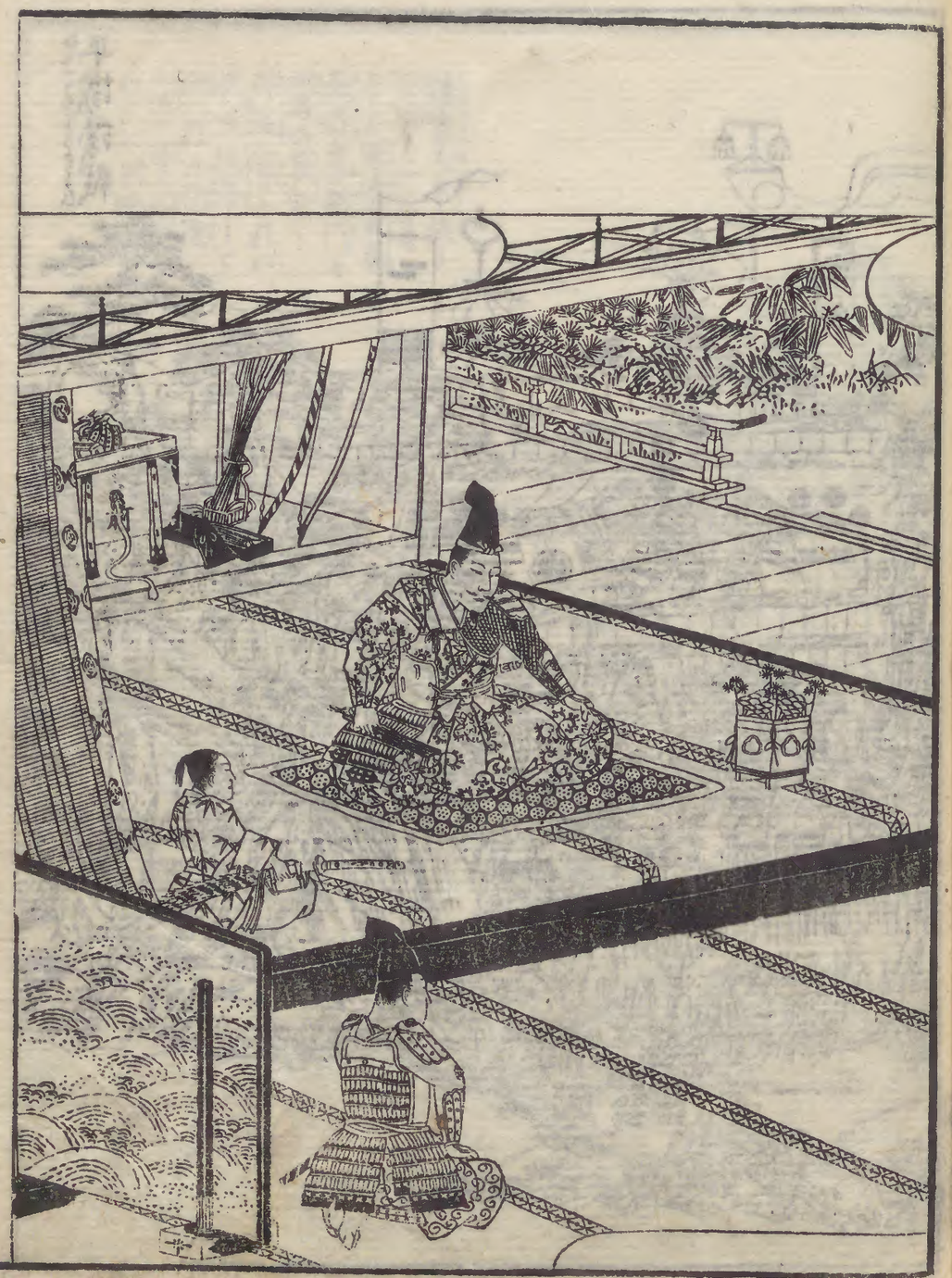
平塚城跡　平塚明神のあゝより北鳥山の辺近をいふ鎌倉大草紙云文明九年四月十三日道灌江戸より出豊鴻平右衛門尉を平塚の城を取巻城外を放火して帰りくふ処ふ豊島兄の勘解由左衛門を頼ける同石神井の城練馬の両城より出攻来りれい右四道灌上杉形部少輔千葉自胤以下江古田沼袋と云所駈向ひ合戦して敵ハ豊島平右衛門尉を始として板橋赤塚以下

此辺
平塚の
跡
王子道

平塚明神社
鎧塚
別當
本社
鎧塚
別當
道灌山道

八幡太郎義家兄弟奥州加征伐凱陣のころ武蔵国より入たまふ豊島某ろ住し平塚の城より逗留ありてあるゝ御僧一領へと賜ゝりけるを後塚より染物屋の漢守と平塚三郎明神といつさおつりしも實へよ武功の去ゝるしむる故なるへし





国立公文書館
National Archives of Japan

平塚城戦

鎌倉大草紙ニ
文明十年正月
廿五日道灌豊島
勘解由左衛門ヲ
平塚の要害ヘ
押寄責ケれハ
其時没落して
敵ハ残り丸間城
小机の城ヘ籠ると
あるハ此平塚の
事なり

白鬚明神社

百五拾人討死す 中略 同十年正月廿五日豊島勘解由左衛門の平塚の要害へ押寄責れい其暁没落して敵八犯九同珠小机の珠よ籠と云云

太追物上覧地　同所道より右の方畑の地を掘て云詳ふ林春齊先生の作せる太追物記ふ出そ図て小畧せり

飛鳥山　數萬歩ふ残たる芝生の丘山ふして春花秋草夏涼冬雪眺あるの勝地なり姫元亨年中豊島左衛門飛鳥祠を移す祭神事代主命図て飛鳥山の号あり寛永年中王子権現御造営の時此山上よりある飛鳥祠を遷して権現の社頭ふ鎮座なしたり其後元文の頃　台命よりて楊樹數千株を植させらる内ふハ遊観の便として外ふハ菊竟の為ふす年を経て花木林となる爾しより騎人墨客ハ白を摘章を尋ね牧童樵夫ハ袖を刈薪をとる殊ふさたらさるの頃ハ樓花燦爛として尋常の観ふあらス熊野の古式ふ

蘭亭高惟馨

飛鳥山前漲碧溪
春來芳樹自成蹊
年年載酒看花處
不似桃源使客迷

葉ハ花を汲て祀るといへるよ相合すふりの歌

文四年の春冷泉前大納言為久卿東下向のれうゝ鳴島信濃の命にて此山のさゝゝを為久卿ゝ嘱られ給ふよ

花鳥山といふ所の花とそ人の見せぬ若木の桜の珠よりもいとゝ香も

似人そ為久ゝ紅戸よりハうけ給さるうの迫さあれと行て見せ給ひと

震の冥よとそむるさるうふあむ

折枝の久香をとすハ花鳥山花の所れ春も去られ　為久

時年再ひ所下向の時伊出京今年ハ花もの花も所見せるさよゝ

咲出ともつけ出花鳥の山樒こその云春の久やとすれ　同

とあるゝゝうハいそさ金輪寺ゝ仰あるて一枝の花をとおれ せあれともたせそ品川の宿ふて

所笑ふいれける

飛鳥山碑銘並序

惟峯國之鎮曰熊埜之山有神曰熊埜之神實伊弉冊尊也配祀伊弉諾尊事解王子或稱之三神事解別爲飛鳥之祠三狐神副焉語在神史中別録藏焉解誌曰在皆元亨中武之豊島郡豊島氏紀兆豊島郡爲熊埜神坐地之曰王子山之曰豊飛鳥蓋自此始也熊埜之川曰音無川流象焉爾來四百有祀土人以昔祀之如一日矣祀典曰熊埜之神春以花祀鼓之吹之旗之歌之舞之今之王子祀日鼓吹旗歌舞者其來也尚矣而世之邈祠宇荒壞風日不蔽越暨寛永中有司奉命祇飾祠事乃因故兆新之遂遷飛鳥

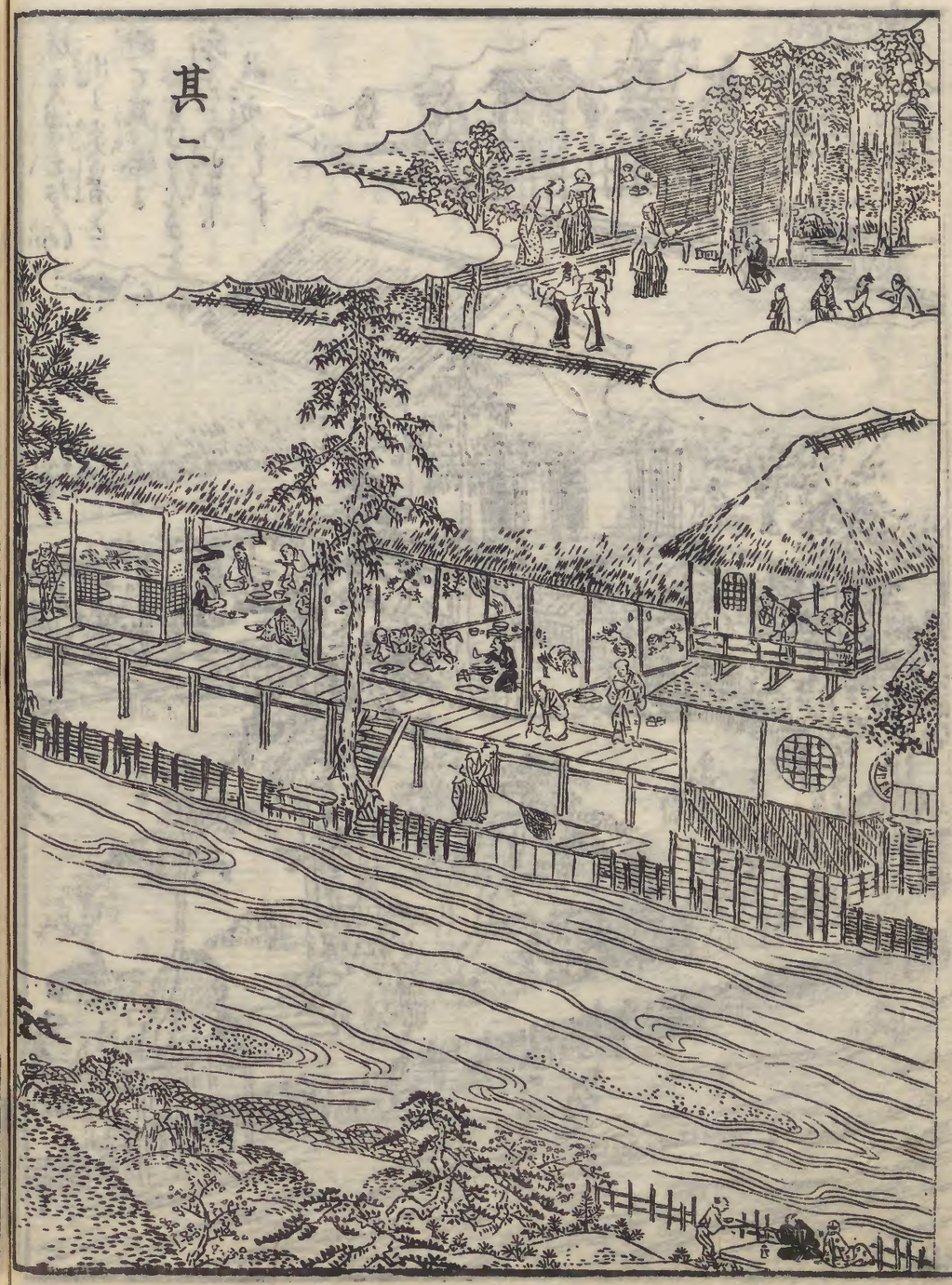
飛鳥山
全圖
飛鳥橋
此辺料理屋
此辺料理屋
飛鳥橋

花を
いて
まゐり
たゝこむ
霞
の
丸
嵐雪

国立公文書館
National Archives of Japan

飛鳥橋の
あなたこなたハ
貨食
鋪の
亭造
壮麗
なるに
後亭の
すゝまハ
敏潔たる
音羽川の
下流をうけて
生洲をかまへ
この地たるよ
都下を離るゝとも
常に王孫の
稲荷へ行する人こゝに
憩ひ
臨ひ
沈酔
催し
すゝも
多し
夏日ハ

殊更凜々たる
風に炎暑を
避て席を
おりむしんるを
忘るゝの
水
炎
す



祠於本祠飛鳥之山右名無祠者由焉三狐祠僻在北鼓云今茲丁巳春三月己亥我后首畊之次規土封飛鳥之山獨給祠無所與永屬奉祠者衛等恭奉祠乃蹈舞捧手稽首敬八之曰於穆我后事神以誠治人以明揖則正施則行以諟樂郊爲神之鄉神其不歆明惠惟馨初飛鳥之山蓬顆蔬壤雉兎徑焉車駕之肇洞從而紀蕃來也有司行邑吏容谿谷道泉瀑磐硎磐硎數十人旋乃植花木數千株內成游觀外便蒭蕘雇役皆爛熳焉奇非邪抑亦爲林毎春冥契會之花祀者以以爲表

元文于巳之秋

奉祠金輪寺住持權大僧都宥衛大
東都圖書府主事鳴鳳鄉代撰拜書

碑陰飛鳥山四至牓示

自艮至坤七十三歩
自巽至乾二百二歩

加藤忠郁刻

石是勒千載懿範

其麗封域豈億繁衍

有神閑國

來跡率紀　東土是祀
神之眷祐　豐穰薦至
八埏懷仁　神祇饗惠

短冊公海舊跡

今より六十年あまりのむかし此山の麓に住る翁あり名を勝行といふ行ぬ冊の義と云海事の花の盛にあかぬこゝろに短冊を賣を以て世の業とし園に人是を呼んで短を集ると已う集とんに元文の頃大樹わされんたんの短冊を見をるいにしへ歌仙等と下に勝ひ心とを翁の事を常に集るものゝ俳哥をうち誦して志を養ふされと後其跡をかくして絶不をきん

王子権現社

飛鳥山の北の方音無河を隔てあり

本殿　祭神　伊特冊尊（龍速玉男命　木軽解男命）　三神鎮座

社記曰若一王子社ハ紀伊國熊野権現を勧請ス後醍醐天皇の御宇元亨年中豊島何々〜の主とうや新に祠宇を建て崇けるゆ陽霜ぬり案月深〜て朝の霧ハ香を焚かとあや〜ミ夜の月ハ燈を挑ふ似せゝう霊神ハ人の敬よりて其威をま〜境致ハ霊神の徳ふよりて其名を弘ムほら〜此神の本を尋れハ伊特諾伊特冊の尊と申ス二柱のみこと國土をうみ萬の物をうやう其廣大の功徳既ふ成て後伊特冊尊神退ま〜れハ紀州熊野の有馬村よりおちやまつふ熊野大神是なり此神を祭るふゆ春ハ花をもて祭り鼓うち笛吹旗立て調筆て祭る白河院の御製ふ咲白ハ花のけ〜きを見ふ〜〜ふ神のんそ〜ふ志らるくとよみぬるハ花志らの事なるへし此神の御ふを熊野早玉男とまふ其第二

咲ふ梅ふ
さ乳の
ゝ〜きを
ゝるかゝふ
神の
ふゝと
ゝゝゝ
ゝゝゝ
白河院御製
大神宮
東照宮
権現
本社
白山
薬王
十二所
氷川
富士山
山王
番神
天満宮
酒井
康家
駒宮

其二
あすか山
関明神
おまう明神
若一王子
荒神
童樓
御供所
舞堂
樓門
本地堂
不動堂
番所
中堂

国立公文書館
National Archives of Japan

祭禮

毎歳七月十三日神前の
幕を
ひと十二番の
拍子あり此日用
―毎年赤得水の
うける番付と掲る
たのし―

第一番 中門口
第二番 道行腰作
第三番 行違腰作
第四番 脊摺腰作
第五番 中居腰作
第六番 三拍子腰作
第七番 點禮腰作
第八番 捻三度
第九番 中立腰作
第十番 搗作腰作
第十一番 作流
第十二番 子魔歸

を泉津事解男と申し延喜の帝の御時諸國の神社を記され
しは紀伊國牟婁郡熊野早玉神社とあるハ是なり此故に伊弉
冊尊早玉男事解男是を熊野三所權現といひならハせるよ
になりぬと云

按に當社縁起に元亨年中豐島氏新に祠宇を建て崇けるよし記せり當社別
當金輪寺に収る所の大般若經の奥にも文保二年とあれハ權輿ハ文保より以前にして
元亨に初て社を營しなるへし小田原北条家分限帳に王子領江戸上平川下平川牛込
の内にて以上廿八貫八百六十文の地を領ぜしとあり

當社縁起三巻 詞章ハ民部卿法印道春畫ハ狩野尚信筆者ハ鈴木氏とそ

跋曰武州豐島郡若一王子社者所勸請熊野權現
也頃年
征夷大將軍左大臣從一位源大君治世理国之暇敬
神勢民之餘造替當社然以其未有縁起故忽降ニ畫
鈞命令愚拙撰其詞於是能書揮行草之勢畫ニ
丹青之義其功已成装爲三軸以納社内誠是神宝
之最也須遺芳於万世而擢神威以鎮邦家者也奉
命者復使愚拙記其事於軸末於是乎書
寛永十八年七月十七日　民部卿法印道春敬書

熊野三神傳記壹巻 金輪寺に傳ふ元文三年成島氏信遍 台命を奉して是を識さる飛鳥山碑文の中に所謂別録を藏すとあるハ此傳記の事なり

熊埜三神傳記曰
熊埜之神蓋三祀皆屬牟婁郡隷紀府治一曰本宮
祀伊弉冊尊及速玉雄命事解男命也二曰新宮距
本宮六十有里三曰那智距本宮五十里傳曰崇神
帝六十五年始建本宮景行帝五十八年又建新宮
唯那智不詳起何旹也神史所載伊弉諸尊伊弉冊
尊所過而化乃生國土草木終生軻遇実是爲火神
冊尊既因生火之神所灼而去矣乃華紀之阿哩馬
邑邑有華窟局㚙神之地以故士俗祀之以花結繩
爲播鼓樂舞踊今尚然也蓋古之遺也有塵旧祠又
祀二神之地其跡業已在本宮先云又曰閒闢之始
冥冥中有物象帝之先號國常立尊神之代七焉傳
至二神始生日神是稱天照大神又曰弱宮或號弱
一王子共配熊埜祠至新宮那智亦類依其例凢我
語神之道形於人物於悳其逑玉事解二王子者特
分稱二神之悳是已是其大略也若夫飛鳥三楓徐
福八恐鳥自外諸祠則自上世所副各有其傳存焉
鳳卿聞之紀人熊埜之山負海而昇峙天工之所造
神而秀不可體矣厥石磊研而麗厥水澄徹而耳厥
草木區萌而逵厥土壞赤壇而肥神之止焉固其所
乎聖者之出寧知不在斯乎豈齊興雲雨降福鼇不
測之謂神其不然邪蓋二神之跡在彼盤右之紀邪
其必在結繩先而神德不可掉如斯夫神統千世確
乎不遷嗟乎神之國其嗜不欽哉鳳卿日代撰飛鳥
山碑遂閼舊史謹叙三神事如此
元文丁巳之冬東都中秘書火監源鳳卿子陽謹識

大般若経巻第三百四十九　観音（巻を）ふるのこゝ余八室層六年上加の瓦屋村正法寺
奉施入武州豊島郡熊野権現御寶前文保二年戊午初秋
大施主右衛門尉平行秦敬白とあり
古證文二通　小条氏巧氏直神領　千鳥屋風一雙　野右法眼元信の筆なり
奇附の證文なり
蘆屋釜一口　小条氏直の奉納なり

祭禮例年七月十三日ふ〳〵て十貳番の指板なり　此日玉ゐ村の童孫
て繁昌国に祭終て後家衛の貴賤彼岸を携て殺り火災盗難を除くの守護と成是
も古よりの習俗とそゝ〳〵其外一年七十余度の祭礼連綿として四方安寧五穀豊
饒の祷怠慢なる〳〵

本地堂　本社の北にあり弥陀薬師千手　若一王子宮　本社の右にあり新宮天照
大悲を安置せり　左旨霊貴尊を頂る
飛鳥祠　同門内にあり神八幡代主の命に依て當社の境内
勸請なり姫八幡鳥也とあり〳〵ろ賢秋の頃
迄坐　康家清光社　同本社の左にあり是豊島を肩康永月権頭清光之
に　霊を祭る其余末社多〳〵とともに畧く
樓門額

仁和寺覚深法親王真蹟

當社はすゝて紀列熊野山の地勢を寫し前に音〻川の流をうけて
風色真に多り荒の時は荒をとりて祀といふ神を祭る因るや社頭に
多く梯樹を植て春の頃は境内殊に観賞あり亦冬月雪の眺
全も他に勝れり

王子稲荷社　同北の方にあり往古は岸稲荷と号し今當社より出すと
ころの牛黄宝印を去る記せり

本殿　倉稲魂命　聖観世音　薬師如来　本宮　十一面観世音
陀枳尼天

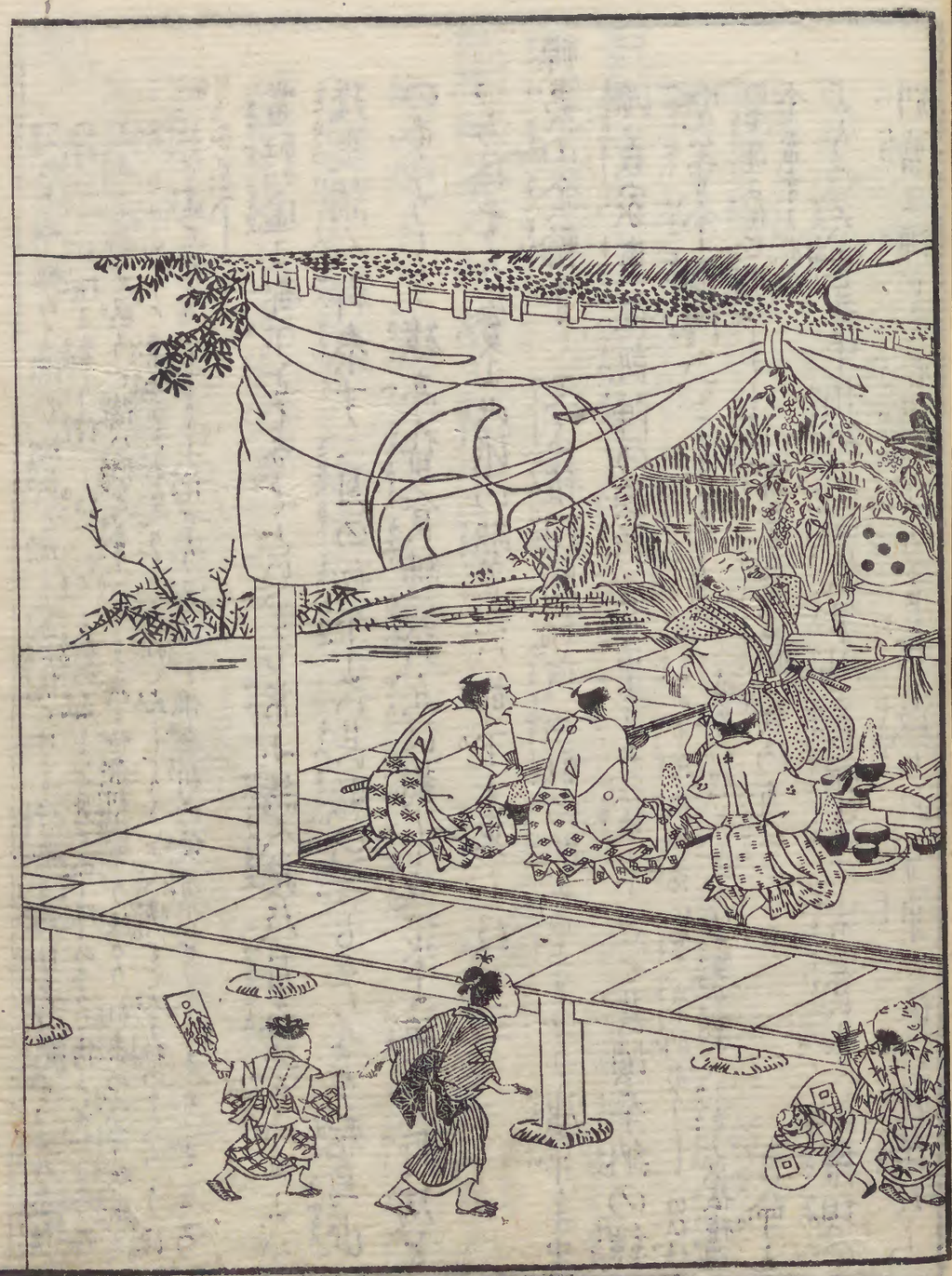
王子権現縁起曰いつれの世ふるあり久し此社の傍に稲荷明神をうつ
しいさひろれは毎年晩春の夜諸方の命婦此社へ集り来る其ともせる
火の連りつけるまそくるの松明を並ふるゝ如く數解の蛍を放
光しむるに似たり其道野山を通ひ河辺をかゝる不同を見て明年の
豊凶を知ると云ふ命婦の名の白と九の尾あるは奇瑞のりのるとも
古き書に有りとかむ下畧
因云今の世三狐神の名に附会して伊奈利を白狐とするのは大なる誤りなり又
狐を伊奈利の使者とし〳〵ふことは命婦とゝくは或書に云後小松帝の嘉徳年中

いなり
本社
神木
此辺茶屋

王子稲荷社
本宮
りうゐん社
東天
此辺茶屋

狐火

毎歳十二月晦日の夜諸方の狐数しくさゝ集り来るよ例なして今ゝ燈火の影ゝ依て士民明年の豊凶をとゝ此事霊験あらたゝ暁り始て時刻定る事なり



十八講

毎歳正月十七日
玉ゐ村農家ゑ
是と行ふ當日
権現の別當金輪
寺の住持を
招請し酒飯の
饗応半ゐして
當番の百姓村
仏餐魚盤の
三品を携へ出て
のめとよいやさの
音聲とおして
食をとらくむ
是此地の舊
例よりて
十八講と号る
神領十八箇
村あり頃の
旧村と

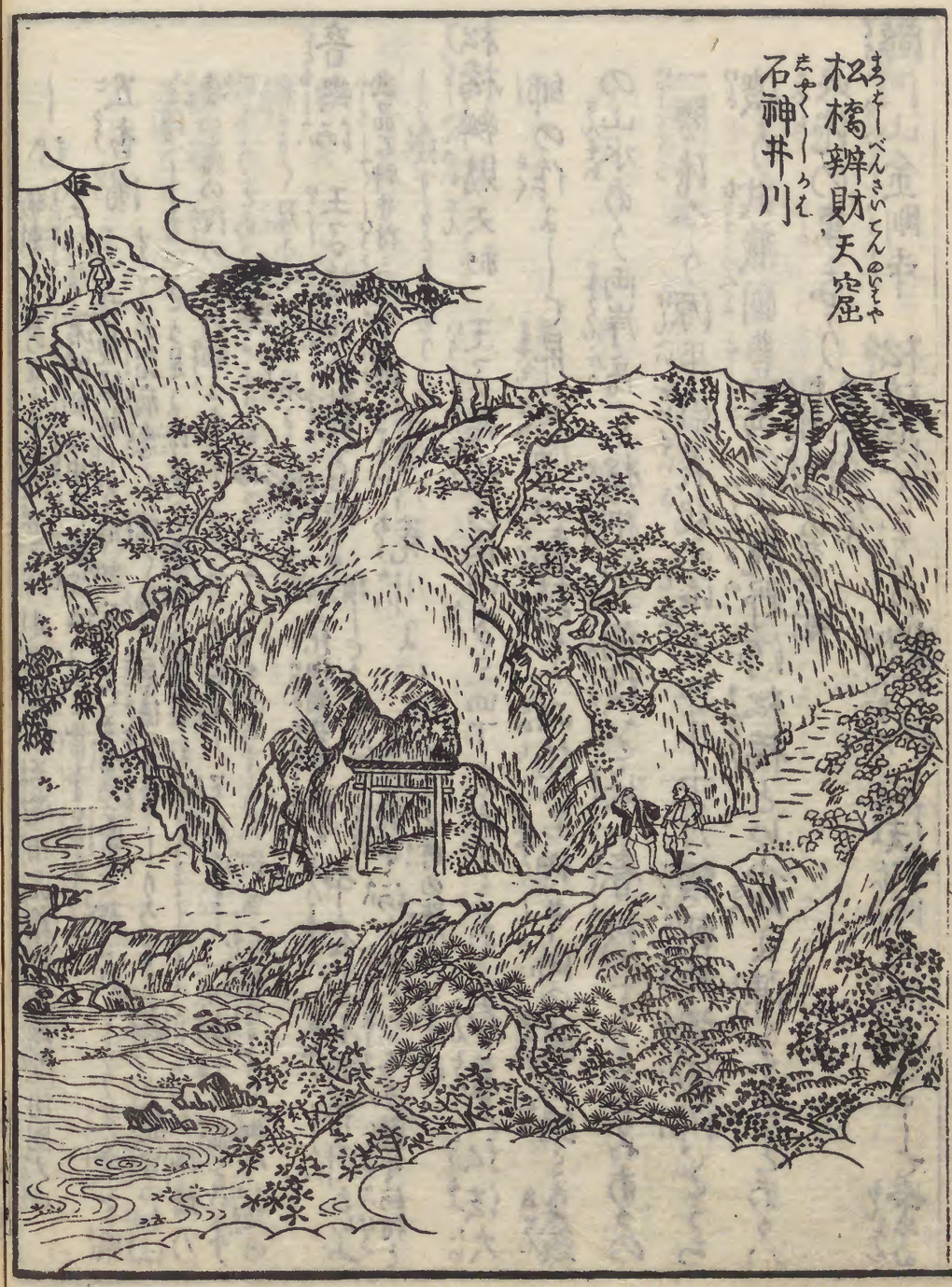
一人の老命婦あり深く稲荷と信じ毎日侍てけるよ命婦ゐ飼ける狐あり必ず来て
の時ハ先(社檀)より来り待しなに社人も狐のまゐるを見て命婦のもとに侍るを
も年老世を退りて後ハ狐を養ふ者もなく海よ伊奈利山に至り住り社家の人命婦
給つけ呼出して菓物あるとあくるる年一百年にして光りをかくし人驚きて本社のくらもりに
社を建て祀りしよりこれ狐と伊奈利の使者とぜしよりところ
おふへし

當社ハ遥よ都下ををるくといへとも常ゐ諸人絶ず月毎の午の日よハ
殊更諸人群参す二月の初午よハ其賑ひ言もさらなり飛鳥山
のあくうよう旗亭貨食舗或ハ丘に對し或ハ水よ臨むて軒端を
つら孫そう賓よ此地の繁花ハ都下よあらず

禅夷山金輪寺　王子権現同稲荷両社の別當寺なり康平年中
源義家東征凱陣の頃新よ當寺を營しとそ其頃奉納の鎧
兜等今猶傳くてこそよあり治兼四年頼朝稲荷の宮へ奉納ありしといひ
の宝庫よ併ぜ納るよしよて當寺昔ハ新義の真言宗
今當寺よあり義家の願巻をひ雑刀等ハえ京以後権現
よりて天正年中相列小田原早川真福寺の宥養上人を権現の
別當よ補ぜられ此時より古義よ改られ寧東一流の棟梁たら
しむ

八大坊縁倉鶴岡坊中荘厳院

王子権現縁起曰ある時記宣して五番の薬を授られしより其薬を服
するの諸病悉く除く神の恩徳甚厚しとこそ真人ゐ龍宮の秘法
を傳へしもいくそう是よ傍くさ薬師れ者のなれ淄陽乃
壺の酒の人を助るまつしそ佛を醫王と号ぐ衆生の病をといふ
かなりとあるもけるもとなんえ行ゐとそ云云此ゐすりハ別當金輪寺より出ぐ一切の
病よりく珠ふ小児よ用るよ効あり紀伊國音受河を本名を石神井川といふ
武州石神井村三宝寺の池俗潦水のと云ハ俗称なり離水河村と
より發するところあり下流ハ荒川よいふ号して河の端よハ赤ぐ
松橋辨財天社　王子権現の西の方三四丁むるうよあり本尊ハ弘法大
師の作よして昔大師の勧請なり此地ハ石神井河の流ふ臨む自然
の山水あり西岸高く樣概の二樹枝を交へ春秋ともよあるわあるの
一勝地なり源平盛衰記ふ治兼四年十月頼朝郷隅田河をうち
渡り武蔵国豊島の上龍野河松橋といふ処よ陣をとるとあるハ
此地の事なり　頼朝奉納の名刀一振　当社宝物なり
龍河山金剛寺　松橋院と号ぐ　松橋院天　弘法大師の冠基よして本尊



国立公文書館
National Archives of Japan

不動瀧
泉流瀧とも云

正受院の本堂の
後坂洛
わるへ
板十丈の
して
飛泉
あり
滔々として
背壁より
趨る
此境い
常に
蒼樹茂り
燃す

不動尊ハ昇大師の作なり其後あゝの星霜を経て荒廃
ふをゝのひ他の宗風に化せり天文の頃中興阿闍梨春印あるゝの
曩祖冠基の霊地をして他の宗風に轉せ〜事を歎き其頃小条
氏康ふ訟へて再真言の霊區に復せ〜むとう

瀧不動尊　金剛寺の東二丁ばかりあり此境後ハ石神井川
に臨やり寺跡正受院と号く〜傳云弘治年中和加龍門の奥ふ
学仏坊といふる僧住て不動尊の法を修する事年あり或時霊夢
を得て東國に来り此所に瀧のほりくらかを観て是を幸と〜
其傍ふ庵を結ひて不動の法を修せり去るふ其年の秋洪水に
て此河縣〜く水かさまさりしに瀧中に光あり水落るの後彼
光のさ〜くるあゝりを求るに不動の霊像を得きり不例に感得
せ〜とよろこひ昇こゝふ安置し奉るとそ

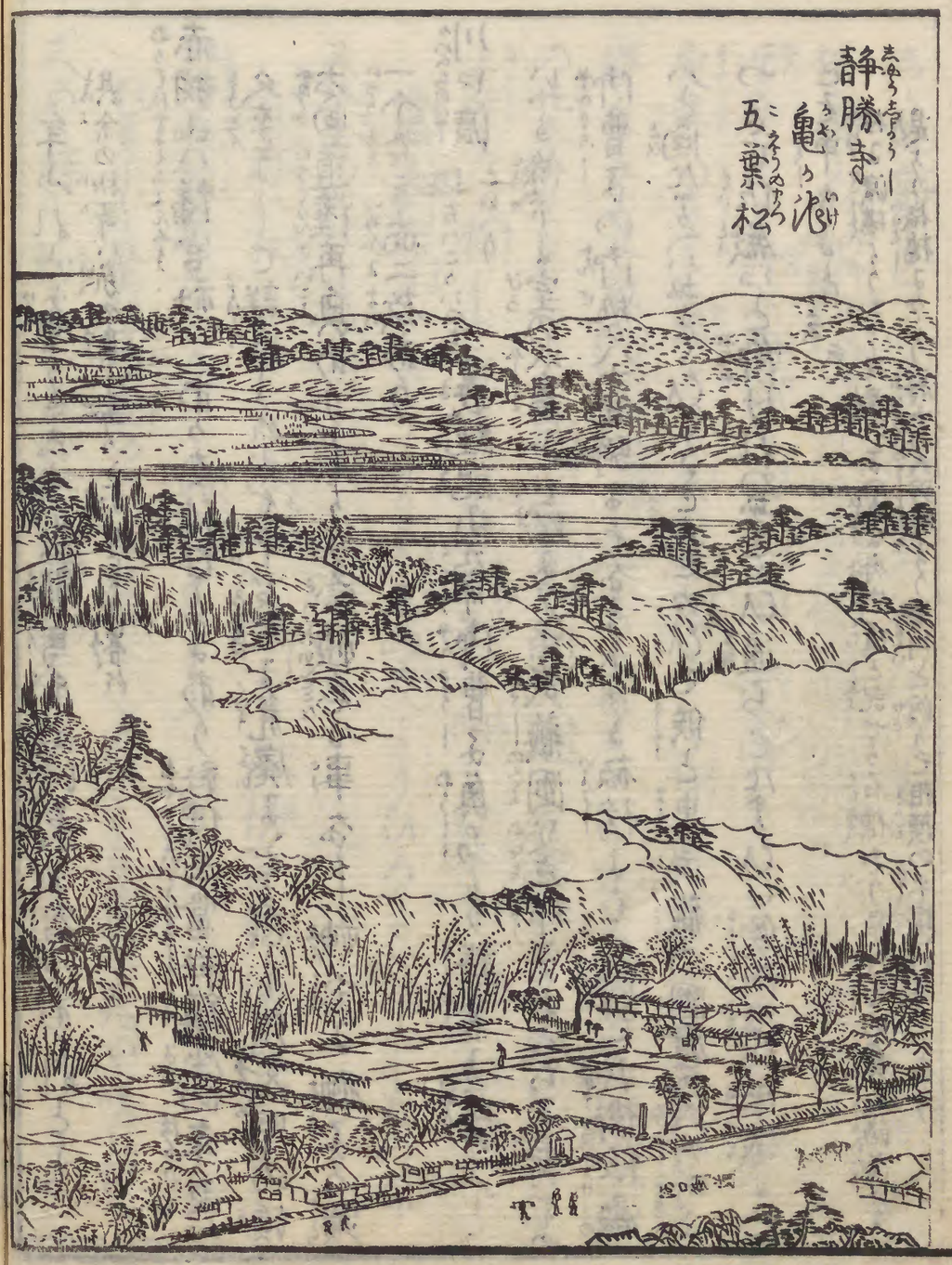
自得山静勝寺　曹洞流の禪宗にして稲付ふあり此地ハ右図道灌
向讃の居跡なり道灌亡ふるの後ハ狐兎の棲〜とゝなりけるを中頃
泮水浮雲の僧あつて此所ふ草庵を結ひ道灌寺と号す是當
寺の草創なり其後右図家より當寺を建立ありて静勝寺
と改む

観音堂　本尊十一面観音ハ泥塗澄の作　弘道灌入道の
景堂　木像を置
五葉松　南の方畑の中に有　道灌手植の中興伝　まの後の方にあり号とゝ
抑右図左衛門尉太資長ハ　亀ろ　霊亀おけるより号とゝ
或ハ持資と号く初の名ハ源六郎　此ハ尼金吾と称く羅髪
して道灌ふ春苑香月静勝と号く永享四年壬子相加
る　源三位頼政十世の孫備中守資清入道道真のすゑなり扇谷上杉
修理太夫定政ふ属し江戸城ふ住す父と共ふ武毅勇烈等東
ふ覆ふ故ふ人唱んて真潅と称くまゝ城を築くふ巧なり東西
の城多ハ道潅の指圖ふして築所なり長禄元年武加江戸城を
草創し城中ふ燕處の室をいとなゝ静勝と名ケ〜西を含雪
といひ東を泊船と称く和漢の書を集る事幾千巻といふを

去る比常よこゝに在て詩歌をたしむ仍深北に菅神を勧請し祠
を建る（今の所謂西平川）此時両上杉（菊谷上杉憲定定正山内上杉兵部少輔房顕）権をはらそむ
ものこれを後に聞て定正より道灌をうたがひしむるゆへ
定正人をして灌を浴室に刺殺さしむ時に文明十八年丙午七月廿
四日年五十五歳（相州糟屋図書）死のそむて云く余を害する人定正亡家
の北をうとをたして定正威衰へ再び振ひ灌より先寛正年中
上洛す　勅してむさしの勝景を問しむ和哥を以て答へ奉る
露垂れ方もあらそふ夕立の空よりひろさむさしの原
又平生の眺望残とゝしむ
家庵に松原つゝさ海をへ富士の高根を軒端にとゝる
此時感感のあまり　御製をたまふ
むさしの野に高萱のこゝとゝもひしよかゝる言葉の花や咲らむ
又ある時　勅して角田河の都鳥をとはしめたまふ

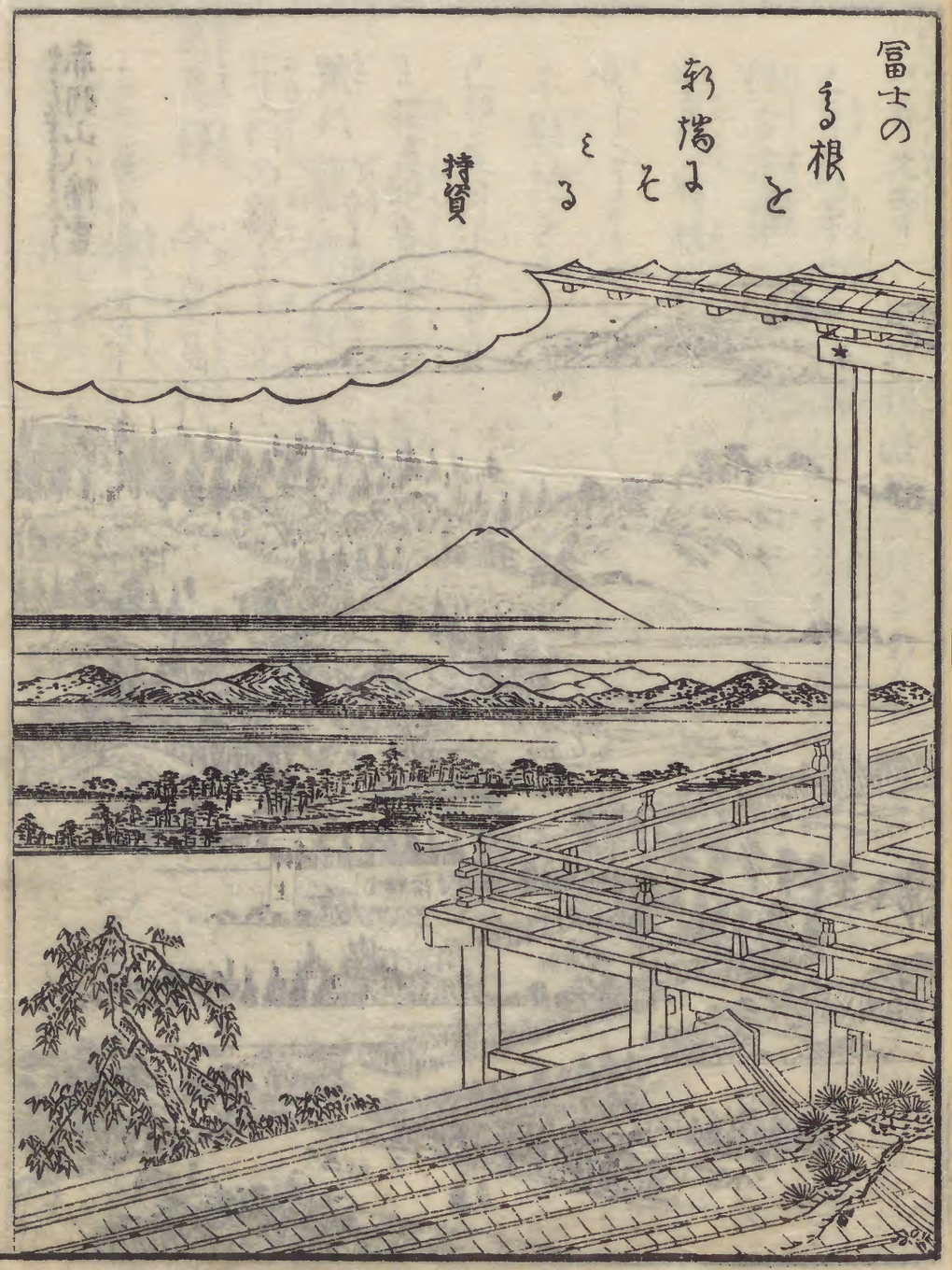
年ふれと家ゝさたらぬ都鳥角田河原に宿はあれとも
其余の和哥は家の集に出るを以てこゝに略す

赤羽山八幡宮社　あらを移むしよあり社傳云當社鎮座の年歴は
久をしして詳ならぬとそ中古大に荒廃ようひし文明の頃
太田道灌再興あり祭禮怠る事なし神宝に獅子の頭
一个古き面二枚あり
川口渡（往古はこうはいち）義経記に九郎佐曹子奥州より鎌倉に至のこと
いつる條下に室の八島ををゝよゝて武蔵國豆豆郡こゝにあ
佐曹子の御勢八十五騎にそなりに成る板橋にて兵衛佐殿
に向たまへはとゝひこゝを立せめひて候と申武蔵の國府の六所町に
つきて佐殿に仰けれは此とゝひ通らせたまひて候相模の平塚に
こそ申々ると云云
桜に渡場より三十程南の方の尤に府中道と記せる石標あり是往古の奥州海道なり
是より板橋に府中の六所町より玉川と渡りて相模の平塚に出て有



懸雲燈
圓通閣
灌公祠
梵鯨樓
古城坳
樓鶴壕
霊亀池
蟠松岡

右當寺の八勝あり況彼石正倚の詩あり是を畧す



国立公文書館
National Archives of Japan

川口善光寺　川口村渡場の北よりあり天台宗にして平等山阿弥陀院と号し本堂ハ阿弥陀如来観音勢至三尊を安す寺傳曰往古定尊といる沙門あり法華経を誦すれ外沈あり建久五年の夏一時睡眠の中に信加善光寺如来の霊告を得る事あつて速に かくこまうふて正しくぬ来の聖容を拜し示現に依て十方に勧を 財施を集金銅を以て中尊阿弥陀佛を鑄奉る時に建久六年 己卯五月十五日なり　佛の胸中ハ三寸五分の水晶の宝塔をこめ 佛舎利四十八顆を収めたてまつる　同六月廿八日廿九日 に脇士観音勢至の二尊を鑄奉る終に堂宇を建立して善光寺と 号し告に依て四十八日の間四十八度の冠眼供養を修行し奉師如来降臨ありて 當佛の頂と摩てともに冠眼を開たまふ　當寺縁起に詳なり 二王門の額に平等山とあるハ黄壁木庵の筆なり

豊島驛　今豊島村と号する地其旧跡にして往古ハ此郡の府なり しと見え續日本記に武蔵国乗潴　今其所を訓もて詳なり　豊島の二駅の事を 略たりし和名抄に武蔵国豊島郡とある中驛家と記せるハ忘らしハ

川口善光寺

本堂

叡立尊王

西善院

八幡

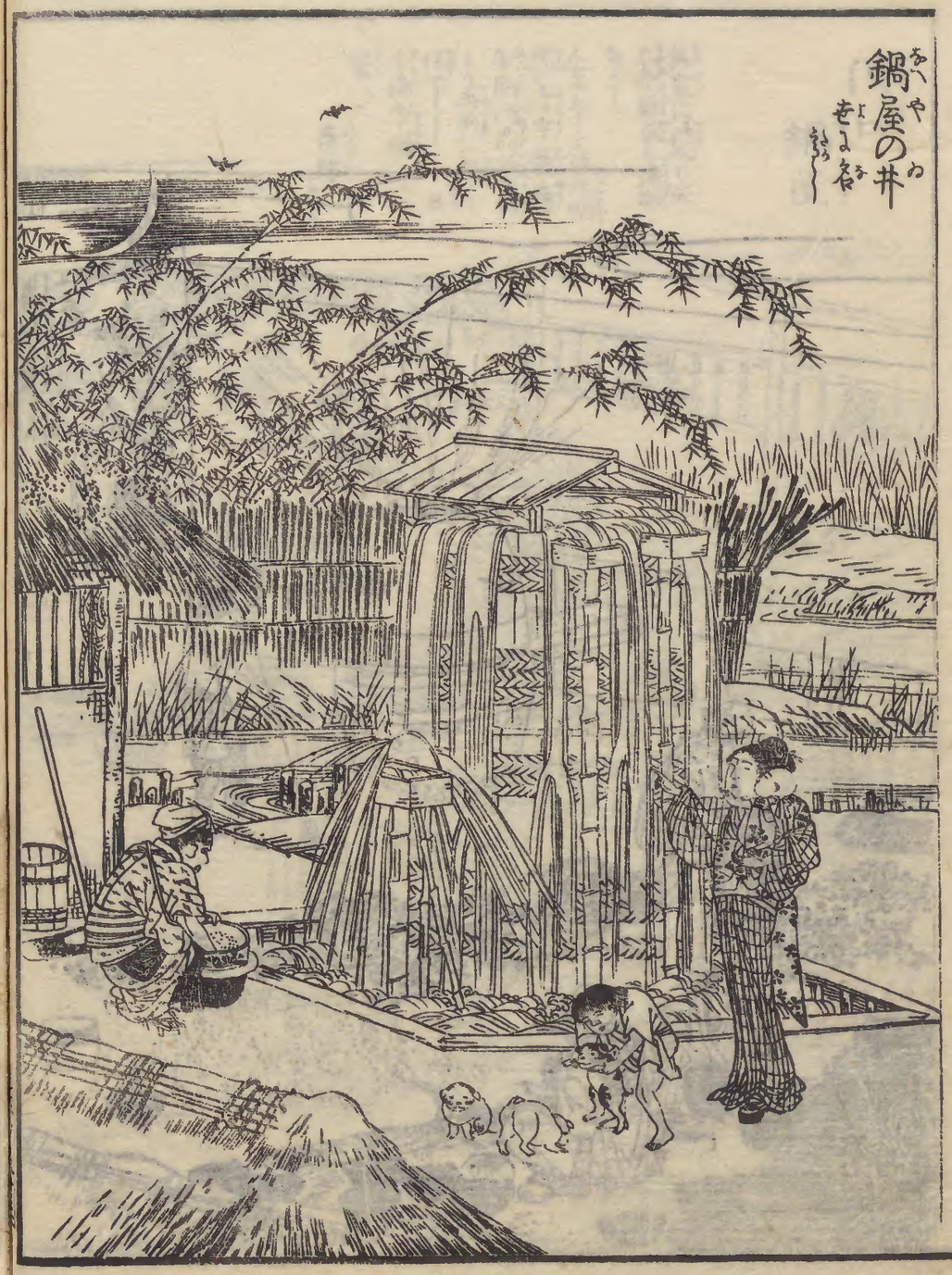
東明院

十二神

三王

大門並木

河口鍋匠
其家に伝へて云
天命國家ろ後世
ろうと
人皇九十七代光明
院の年号暦應
年間河内丹南郡
より此所に移り
住すること其
子孫今猶ここに
栄へて
連綿たり



鍋屋の井
せよ名

此地ゆゑん故或人云豊島郡誌僧よ豊何院字豊島右京義近と云一人此地よありて八幡右京義家よ仕へ一地を戴けとえ東臨よ仁治二年冐廿五日の祭下よ大宮三郎盛貞豊島又右京時光と武蔵国豊島右太食名を相論ひ八大宮の有忠ら四一手を打より事起ることあれハそ鳩氏代々こゝよ住せ一とゝ人えたりの鎌倉大草紙ハ文明九年豊島勘解由左衛門尉泰経舎弟平右衛門泰明平塚の陣よありて道灌といとゝ戰ひ敗よ討死一明十年背陰陣すとあれハ文明の頃ハ豊島村の地ハ住せさる一ゆゑん永徳年中北条ら限帳よ右田新六郎知行の中よ一戸豊島の地名を加へ按よ永徳の頃ハ右田新六郎知行せ一とうゑんなり

三縁山西福寺　豊島よあり禅宗よ一て行基菩薩の定基なり本尊阿弥陀如来も同作なり　豊島権頭清光建立　當寺ハ六阿弥陀寺壹番目よ一て是を元木の如来と云称起あれとも未詳なし四巻目小石川光圓寺の条下と照一合せて見るへ一

梶原塚　梶原堀内豊嶋川の河曲堤の本よあり　此塚ハ右田義濃守入道資正墳墓なり　梶原上總介始鎌倉よ属一後依行の幕下なり　法名道善入三樂齊と号ス　の次男梶原源右政景の京保の頃迄ハ石碑石櫃あり一し洪水の時豊島川へ崩し込けるとて今ハ小巻の中よ一株の桑の木存せり　永禄二年小条家分限帳よ右田新六郎知行の内よ梶原塔内とそ載たる分の地を加へなり　又平塚明神の北北鳥山

西福寺
六河ほだ
第壹番
梶原塚
川まつ
梶原塚

六
阿弥陀
かけて
なむ
らむ
なと
さん
其角
堂本
井
うそ枕
二王

の麓より今梶原屋鋪跡といつる所あり按るに是も政景の家
宅の地なるべし
醍醐王山清光寺　豊島村にあり真言宗にして豊嶋権頭清光の冠
基なり本尊不動明王八清光建立なり〳〵七佛の隨一なり清光八頼朝
の家臣にして當寺八則清光舊跡の地なりとぞ
釋迦堂　境内にあり是も七佛の中なり
豊島右京亮康家同権頭清光墳墓　同所に古松一株あり土民是を
称して豊嶋の大松といつる　康家八清光の父なり
紀加明神社　清光寺より三丁ばかり隔てあり祭神八五十猛命大
屋津姫命抓津姫命三坐なり
日本紀神代巻一書曰素戔嗚尊之子號曰五十猛命妹大屋津姫命次抓津姫命凡此三神亦能分布
木種昂奉渡於紀伊國也云云
社傳云往古豊島氏某王ゑ権現を勧請せ〳〵頃彼地の未社ゑ

国立公文書館
National Archives of Japan

鎮坐あーけるよ所あつて天文年中今の地小宮居を移せーとて當社ハ
昔より豊島村の産土神ゑーて祭例ハ毎歳九月十八日執行ふ社司玲木氏ハ
紀州加ようゑ来る彼地ハ名司の後裔ありといへり　観音堂　因所ゑあり本尊ハ馬頭観世音の像ありと云ふ此地も
地蔵堂　豊嶋川の端ゑあり亀島山専称院と号ス本尊地蔵菩薩ハ
行基大士彫刻の霊像ゑーて豊島左衛門尉清光建立あり七佛
の一なり宝永二年乙酉祐天大僧正此地の住人白倉四郎左衛門といる
ものゝ助ゑ依て再建ーゆゑ同四年正月廿七日入佛供養あり僧正其頃
群衆の男女ゑ十念授與ありーー舊跡ありゑ堂内ゑ祐天僧正自ら
冥眼ありーー六拾九歳の尊像を置名号を添らるゝ俗是を称ーて冥眼の名
訶羅多山地蔵尊是も僧正の本地佛ゑーて自ら冥眼ありーとあり
岩宮八幡宮　因所ゑ島川の端ゑあり當社ハ豊島権頭
清光の霊と称ることゝあり

終畢

江戸名所圖會玉衡之巻

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan